

趣 旨 説 明

伊 藤 安 男

人類集団が居住し、かつ生産活動を行ううえで、「水」は不可欠の要素である。とくに水稻栽培を基調としてきたわが国では、水とのかかわりは欧米とは大きく異なっていた。それを端的に示すのが、デルタ地帯の歴史的な土地利用である。新しく水田を開発していく過程で人々は、治水と利水という両面をたくみに調和させながら今日にいたった。

しかし、このような歴史的発展のなかで、現在では水とのかかわりは大きく変容してきた。今回のシンポジウム『水と歴史地理』はこの流れのなかで、その視点から、過去から現在にいたる水とのかかわりをグローバルにとらえようとするものである。

歴史地理学会では、いままでに水をテーマとした共通課題に「水害」「河川」「湖沼」「治水」「利水」があり、これらの問題に歴史地理学的にアプローチして、社会にその重要性をアピールしてきた。今回はその総括ともいうべきものである。

このシンポジウムは、各発表者のテーマをみても分かるように、現実の水問題を考えるときに過去の水思想、水倫理をふまえて思考すべきであることを、フィールドワークをふまえて論考していることに大きな意義がある。

発表者5人の問題提起を要約すると、内田和子は、わが国の歴史的な治水政策とそれを支えてきた流域住民の水防のあり方を論点に、明治以降の日本各地の水害予防組合、水利組合の組織とその変遷から、現実の防災上の問題点を鋭く指摘している。

元木 靖、有蘭正一郎の両氏は、ともに低湿

地の農業的土地利用について発表している。元木はクリーク水田の実態を復原して、人々が水と共生する側面の理解を深めるとともに、これらのクリーク水田が地域的にみてどのような地域環境、時代的背景のもとに発生したかを述べ、さらにそれらを試案として沿岸部型、内陸部型に分類した。この発表について多くの質疑が出されたが、なかでも「クリーク水田」なる用語について様々な意見が続出し、歴史地理学会の今後の課題とされた。

元木のクリーク水田に対して、有蘭正一郎は、「低湿地水田における冬季高畦の研究」と題して、西南日本の低湿地における農民たちの環境適応への知恵ともいうべき、高畦による耕作法について、その有効性を論じている。20世紀中頃まで存続した冬季の高畦造りは、1950年代の土地改良事業、農外就業機会の増大により大半は消滅したが、木曾三川河口部や琵琶湖東岸では現在でも冬季にトラクターによる高畦造りが行われている点に有蘭は注目して、その有効性の消滅していないことを結語としていることは興味深い。

吉越昭久、藤田裕嗣は、それぞれ鴨川、吉野川を事例に、絵図などからその近世の河川環境を復原しようとしたものである。吉越昭久は、現在のウォーターフロントブーム以前の近世の鴨川において、それがすでにみられたとして、多くの名所図会からそれを実証している。藤田裕嗣は、阿波国絵図から近世の吉野川水系の河川景観をミクロにみようとしている。

(花園大学文学部)